

平成 28 年度富山国際大学附属高校学校評価

富山国際大学附属高等学校

(1) 確かな学力向上に向けた教員の指導力の向上

具体的目標	<ul style="list-style-type: none"> ① 生徒に興味・関心を持たせ学習意欲を刺激し学力を向上させるよう、教材研究と授業の工夫を行う。 ② 新学習指導要領にそった新たな教育を展開できるよう、教材の精選・シラバスの作成と進捗の確認・授業の工夫・試験問題の検討などを行う。 ③ 校内外における研修を通して授業力を高める。 ④ ICT教育を推進し、アクティブ・ラーニングを充実させることで生きる力を育む。
本年度の取組	<ul style="list-style-type: none"> ① 新課程の定着により、計画的に授業をすすめることができた。 ② シラバスにもとづいた授業、授業内容の打ち合わせ、テスト問題や課題の検討などが行われた。 ③ 学校見学、予備校での授業研究等に30名程度派遣した。 ④ 全教科でiPadを使った授業の試みが多くなされ、公開授業を行った。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新課程の求める、教えた（input）知識を言語活動（output）で定着させる授業方法が多く試みられた。 ・ iPad（第2の言語）の活用で、教員の「新しい教育観」に対する意識が徐々に変化し、時代にあった教育方法を研究する意識が芽生えつつある。 ・ 常勤教員のほぼ全員がiPadを購入するなどICT教育推進の機運が高まった。
反省と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多くの教員は、これまでの教育法に疑問を感じ始めているが、積極的に新規の教育法を開発するまでには至っていない。 ・ 成績下位者の手当や不得意科目の克服にやや重点を置きすぎている。上位者に対する個別指導が徹底されていない。 ・ 常勤教諭と非常勤講師ではiPadの活用に温度差が生じている。
評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ① 個の指導の充実 ② 教員の教科指導力 ③ 教員の生活指導力 ④ 生徒の満足度 ⑤ 情報の公開度
観点別自己評価	<p>総合評価 3.0 (A=4、B=3、C=2、D=1として算出)</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 定期的な面談等、生徒自身に費やす時間が増えている。 3 ② 外部研修に積極的に参加する教員が増えたが、自己改革が不十分。 3 ③ 問題行動に対して対症療法に追われ、抜本的な解決につながっていない。 2 ④ 意欲の高い生徒ほど、満足度が低い。 3 ⑤ 事実は様々な方法で、できるだけ公開している。 4
評価委員会評価	個別評価
	<ul style="list-style-type: none"> ① 個の指導の充実 ② 教員の教科指導力 ③ 教員の生活指導力 ④ 生徒の満足度 ④ 情報の公開度
総合評価	
3.0	

(2) 正しい職業観と明確な進路意識の育成

具体的目標	<ul style="list-style-type: none"> ① 保護者・卒業生や上級学校から講師を招き、進路意識を育む。 ② 様々な国から講師をまねき「国際理解講座」を開催し、正しい世界観・社会観を育成する。 ③ 自らの進路を主体的に切り開く能力を涵養できるよう、新たなプログラムを研究開発する。 	
本年度の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ① キャリア教育の一環として「仕事を考えるシンポジウム」・「学校説明会」「上級学校見学会」・「体験入学」・「職場見学会」・「高大連携授業」などを実施。 ② 各界から講師を招き、年15回程度の国際理解講座を実施。 ③ 学校行事と学習活動を結び付ける新たなプログラムを研究中。 	
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生きる力に結びつく、様々な教育機会を提供した。 ・ 学校行事と学習活動との連携意識が教員間に浸透してきた。 	
反省と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1・2年で実施したキャリア教育で育てた進路意識と偏差値による進学指導の間に整合性がない。 ・ 充実した内容の「国際理解講座」が展開されている。 ・ 各教科で「生きる力」を育み、学校行事でそれを定着させるという学習活動が定着していない教科が多い。教科間の差が大きい。 	
評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ① 進路関係行事の内容 ② 国際理解講座の内容と認知度 ③ 行事とカリキュラムの連携の進捗度 ④ 進学・就職実績 	
観点別自己評価	<p>総合評価 2.8 (A=4、B=3、C=2、D=1として算出)</p> <ul style="list-style-type: none"> ① キャリア教育の多くは外部の力に頼っている。 2 ② 内容は充実している。 4 ③ 学習活動と行事の連携という考え方が教員間に徐々に普及してきたが、イベント重視の教員が多い。 2 ④ 推薦入試では一定の成果を収めているものの、一般入試の結果は満足できるまでには至っていない。英語検定では、1級の合格者がでた。 3 	
評価委員会評価		個別評価
	<ul style="list-style-type: none"> ① 進路関係行事の内容 ② 国際理解講座の内容と認知度 ③ 行事とカリキュラムの連携の進捗度 ⑤ 進学・就職実績 	<ul style="list-style-type: none"> ① 2.6 ② 3.4 ③ 2.6 ④ 2.7
		総合評価 2.9

(3) 心豊かな人間性の育成

具体的目標	<ul style="list-style-type: none"> ① 円滑な人間関係を築き、主体的に人生を生きる力を涵養する。 ② 校則を遵守することなどを通して規範意識の向上を図る。 ③ 学習活動、学校行事、部活動に主体的に取り組める生徒を育てる。 ④ 問題を抱えている生徒の早期発見。 ⑤ 国際性を重視した教育を行う。 	
本年度の取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ① 朝の校門での挨拶を全教職員で行っている。ESDの理念を理解できるように文化祭のテーマの柱の一つとした。 ② 部活動の生徒の持つ高い規範意識を、全校生徒へ広める工夫をした。 ③ 学校行事で生徒が主体的に運営すべく努力している。また、授業においても生徒主役の授業を研究している教員が増えている。 ④ 教育支援制度を整え、相談室機能の強化に努めた。 ⑤ 国際交流を積極的に行っており、今年度、新たに3カ国3校と姉妹校提携を結ぶことができた。 	
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校行事への参加姿勢が積極的になった。生徒からの挨拶が増えてきた。 ・ ESDの理念について全校生徒に啓蒙することはできた。 ・ 規範意識が高まりつつある。 ・ 相談室に依存する生徒の数が減少した。 ・ 違いをそのまま受け入れるという素晴らしい能力が育ちつつある。 	
反省と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主体的な生きる力を育てようという意識が低い。 ・ ESD活動が継続的に行われるにはいたっていない。 ・ 規範意識を高めることと、校則を強要することの違いを認識していない生徒指導が多く見受けられる。 ・ 問題が多様化し、教員の意識が追いついていない。 ・ ホストファミリーバンクの創設によってホストファミリー登録をする家庭が増え、短期間の留学生受け入れ態勢は整ったが、長期間の留学生を受け入れる希望者が少ない。 	
評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ① 生徒の問題行動 ② 生徒を導くべき教師の問題行動 ③ 生徒の自主性と行事の運営度 ④ 問題を抱えた生徒の教室復帰の度合い ⑤ 国際交流の内容 	
観点別自己評価	<p>総合評価 2.8 (A=4、B=3、C=2、D=1として算出)</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 事件性のあるものは減少したが、軽微なものが増加した。 3 ② 生徒に対して配慮を欠いた発言をする職員がいた。 2 ③ 教員中心の部活動運営。生徒会活動の沈滞。 2 ④ 相談室から教室復帰した生徒が増えている。退学者数は減少。 3 ⑤ 国際交流の内容は充実している。 4 	
評価委員会 評価	<ul style="list-style-type: none"> ① 生徒の問題行動 ② 生徒を導くべき教師の問題行動 ③ 生徒の自主性と行事の運営度 ④ 問題生徒の教室復帰の度合い ④ 国際交流の内容 	個別評価
		<ul style="list-style-type: none"> ① 2.9 ② 2.5 ③ 2.7 ④ 2.9 ⑤ 3.5 <p style="text-align: center;">総合評価 2.9</p>

(4) 教育環境の充実

具体的目標	① 体育施設の充実を図る。 ② I C T教育推進のための情報環境の増強を図る。 ③ 各フロアに芸術作品の展示をすることで、心の安らぐスペースをさらに増やす。	
本年度の取り組み内容	① グラウンドの補修工事。 ② 普通教室及び主要特別教室の無線LAN工事、ホワイトボード・プロジェクターの設置完了。 ③ 敷地内のバス停の増設。 ④ AEDの増設。	
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 部分的補修を続けることにより、グラウンド状況が改善した。 ・ 全学年でiPadを導入した結果、様々な形の授業が実施されている。 ・ プロジェクターとホワイトボードを有効活用することで、板書などの時間が短縮され、授業の効率化をはかることができた。 ・ 芸術作品を増やし、安らぎのスペースが広がった。 ・ 雨風をしのぐことができるバス停の設置によって生徒の利便性が向上した。 ・ 平成29年度より第二体育館建設のための積み立て開始が決定した。 	
反省と課題	① 改修によりグラウンドの状況は改善しつつあるが、グラウンドを利用する部活動の部員数が増え、手狭になってきた。サブグラウンド等を計画する必要性が生じてきた。 ② 新たな時代を見据えた新情報室の整備が必要になってきた。	
評価の観点	① 体育施設内での生徒の活動中の事故数 ② I C T環境の整備。 ③ やすらぎスペースの大きさ	
観点別自己評価	総合評定 3.0 (A=4、B=3、C=2、D=1として算出) ① 施設が原因での事故は起きていない。 3 ② I C T教育の推進のために県内最先端の環境が整っている。 4 ③ 休み時間、昼食時間にくつろげる癒やしのスペースが少ない。 2	
評価委員会評価	① 体育施設内での生徒の活動中の事故数 ② 普通教室でのI C T環境 ③ やすらぎスペースの大きさ	個別評価
		① 3.2 ② 3.7 ③ 2.8 総合評価 3.2